

〔資料ノート〕

山田盛太郎前所長は、御退職にあたってその蔵書の一部を研究所に寄贈された。その中には資料的価値の高い文献が多数ふくまれており、とくに特定研究「近代化」の推進にあたって、われわれの研究活動を大いに助けるものと確信する。以下の目録は受贈図書の中、主要なもののみに限ったが、他に相当分量に上る農業関係の諸資料がある。ここに誌上をかりて先生の御厚志にたいし、つつしんで御礼申上げる次第である。なお、いただいた書物は二階30号室（もとの先生の研究室）に備えてあるので、閲覧を希望される方は事務局まで申出て下さい。

- ① 「日本経済新誌」 全17巻（明治40～大正4）
- ② 瀧本誠一編 「日本経済叢書」 全36巻（大3～6）
- ③ 同 「続日本経済叢書」 全3巻（大12）
- ④ 瀧本誠一編「佐藤信淵家全集」 全3巻（大14～昭2）
- ⑤ 農地改革記録委員会・農政調査会「農地改革顧末概要」（昭26）
- ⑥ 小野武夫編「徳川時代百姓一揆叢族」上下2冊（昭2）
- ⑦ 小野道雄・土屋喬雄「明治初年農民騒擾録」（昭6）
- ⑧ 小野武夫編「維新農民蜂起譚」（昭5）
- ⑨ 山田盛太郎著「日本農業生産力構造」（1960）
- ⑩ 山田盛太郎編「変革期における地代範疇」（1956）
- ⑪ 新潟県北蒲原郡中蒲村村是調査会「村是」
- ⑫ 「山形県東田川郡広瀬村是調査書」（明36）
- ⑬ 押川・中山・有沢・磯部編「中小工業の発達」（東洋経済新報社刊、昭37）
- ⑭ 同上 「経済発展と中小企業」（昭37）
- ⑮ 同上 「高度成長過程における中小企業の構造変化」（昭37）
- ⑯ 同上 「中小企業統計総覧」（昭35）
- ⑰ 中小企業調査会編「中小工業の発達(2)」（昭37）
- ⑱ 三井鉱山株式会社編「資料三池争議」（昭38）
- ⑲ 八幡製鉄労働組合「八幡製鉄労働運動史」全3巻（昭32～35）
- ⑳ 八幡製鉄株式会社「八幡製鉄所五十年誌」
- ㉑ 土屋喬雄校閲「職事情」 全3巻（昭22～23）
- ㉒ R.H.Inglis Palgrave (ed), Dictionary of Political

Economy ; 3VOLS. (1901)

- ⑳ J. Conrad, W. Lexis u. a. (hrsg.), Handwörterbuch der Staatswissenschaften : Supplement Band ; VOL. I, II, (Jena Gustav. Fischer 1895) .
- ㉑ Ludwig Elster (hrsg.), Wörterbuch der Volkswirtschaft ; 2 Bände (Jena, Gustav Fischer, 1911).
- ㉒ 日本経済史研究所編「日本経済史辞典」上下巻及索引 (日本評論社) (昭17)
- ㉓ 大阪商大研究所編「経済学辞典」索引共I 全6巻 (昭5~7)

〔 所 報 〕

(1) 新所員の委嘱

研究所規程第4条により、次の諸氏が新たに所長より所員を委嘱され、第9回所員総会に報告、承認をえた。

- 西岡 幸 泰 (経済学部助教授 社会政策専攻)
玉 城 哲 (経済学部非常勤講師 農業経済学専攻)
正 村 公 宏 (経済学部兼任講師 日本産業論専攻)
坂 牧 三 郎 (経済学部助手 労働経済論専攻)

(2) 次期部長の決定

現部長の任期は昭和42年9月4日まで (昭和40年6月8日第5回所員総会で選出、任期は同年9月5日より二年間) となっているので、第9回所員総会において次期部長の改選を行った。改選は各部毎に無記名投票、比較多数におこった結果、下記所員が選出され、所長より次期部長を委嘱された。(次期所長の任期は昭和42年9月5日より向う二年間である)

- | | |
|--------------|---------|
| 第1部 (綜合理論部門) | 内 田 義 彦 |
| 第2部 (実体部門) | 大 友 福 夫 |
| 第3部 (歴史部門) | 森 下 澄 夫 |

(3) 第9回定例所員総会

第9回定例所員総会は、昭和42年5月30日 (火) 12時30分より神田校舎第2会議室で開かれた。出席者28名、委任状提出17名。

総会の議事次第は以下の通りである。

- (i) 小林義雄所長の挨拶
- (ii) 新所員紹介。前記(1)に記した通り、西岡幸泰、玉城哲、正村公宏、坂牧三郎の四氏の紹介が行われた。

(iii) 事務局報告。玉垣良典事務局長より次の各項について報告があった。

①特定研究「近代化」の進行状況 ②「日本資本主義構造研究会」の成果とりまとめについて——五月連休明け全員完成の目標は若干ずれたが、夏季休暇前完成を第二次目標として作業中、③「年報」第2号の刊行準備の進行状況——6月末原稿完成、9月刊行を目標として進めている(第2号が未来社より刊行の運びとなった)。第3号は共同研究の成果を軸に編集する方針で、夏休明けに編集計画を確定するよう取運びたい。④個人研究・グループ研究募集および研究成果発表について——募集の要領は従来通り。(締切期日6月20日)今年度は第一回の助成金による研究成果とりまとめの期限にあたるので準備をする必要があること。発表形式については運営委員会で更に検討する。⑤実態調査——鋼管の実態調査は「年報」2号に労働力編成を中心とする中間報告を発表するが、引き続き経営分析を加え完結させる方向で作業を続行する。今年度の新規計画としては、下層労働者の実態調査を発足させる(大友福夫教授の指導下で労働経済グループ中心)。

⑥研究所運営体制の一部変更について——(イ)運営委員として事務局長経験者である長幸男、吉沢芳樹両所員を追加する(5月9日運営委員会で承認)、(ロ)特定研究の進行にともない、研究活動を全体的視野から調整する必要が高まったので、運営委員会の内部に幹事若干名をおき、主として研究活動の内容面の方向づけについて十分な検討を行うことになった。幹事のメンバーは、所長、事務局長、三部長、特定研究「近代化」幹事2名、その他1~2名で構成する。

(iv) 昭和41年度決算報告および42年度実行予算の審議決定。決算報告は全会一致承認、実行予算は原案通り決定された。

(v) 部長改選。前記(2)の通り、内田義彦、大友福夫、森下澄夫の三所員が次期部長に選出された。

(vi) 事務局各部担当者紹介。

(4) 運営委員会の報告

第2回運営委員会は5月27日(土)午後1時より開かれ、前記四氏(1参照)を所員として承認。所員総会の議案を検討した。

第3回運営委員会は6月13日(火)午後2時より開かれ、下記事項を議した。

(i) 研究体制について— 総会での諸発言を参考に、特定研究の主体、特定研究と社研従来の諸研究との関係をめぐり、研究内容の重点設定をもふくめ検討された。内容上の問題はなお今後の検討にゆだねられたが、特定研究と社研の関係については、特定研究の主体は申請メンバーである点が確認され、申請メンバー以外の社研所員との関係については、①「近代化」報告会を学内で開催する場合には、申請メンバー以外の所員の参加を求め、研究成果の交流をはかる。②研究所の部単位の長期テーマを設定し、条件に応じてそれにもとづく合宿研究会を年一回程度計画する。工場見学を社研独自で計画する等、研究所としての独自活動を考える。

(ii) 幹事の選出— 以下の所員を幹事に選出した。

小林義雄(研究所長) 内田義彦(第Ⅰ部長) 大友福夫(第Ⅱ部長) 森下澄夫(第Ⅲ部長) 打田駿一・福島新吾・長幸男・吉沢芳樹(福島・吉沢両氏は特定研究「近代化」幹事として) 玉垣良典(事務局長) 計9名

(iii) 『資本論』第1巻刊行百年記念事業について— 今秋を目標に公開講演会または研究者集会開催案等が検討されたが、結局さしあたり実行可能な案として、「論集」または「年報」誌上に記念特集を社研独自の企画によって発表することが決められた。(担当責任者は石渡貞雄・長幸男)

.....

「月報」 4643 正誤表

	誤	正
4頁 24行	義の生戌と	義の生成と
5頁 9行	37年2月	37年9月
14行	戦後循環	戦後循環
9頁 2行	基磐	基盤

< 研究業績 >

前号以後の所員の研究業績は次のとおりです。

- [著書] 森田桐郎『現代経済の見方考え方』(『三一新書』)
同 『南北問題』(『日本評論社』)

〔論文〕 小林義雄『アメリカ独立資本の対日投資と日本独占資本のこれとの結合関係』
（『政経研究』11）

玉垣良典『転型期総括の若干の問題点』（『経済評論』1967年7月号）

栗木安延『「労働貴族」の経済的基盤』（『経済』1967年4月号）

打田駿一『明治民法の解釈と梅博士の解釈理論』（『松山商大論集』17巻6号）

福島新吾『都公安条例改正への試案』（『現代の眼』1967年7月号）

＜ 編 集 後 記 ＞

1. 月報6月号をお届けする。今回は宮田三郎氏と宮坂宏氏の論文を掲載することができた。第一論文は、地方都市の産業開発を目的とする工場誘致にとみなう利益と住民の利害をめぐる、今日の問題を法的に取扱われたもので興味ある作品である。第二論文は、抗日戦争時代の民族統一戦線の政権工作の一端としての選挙活動を明らかにしようとするところみである。所員各位の批評を期待している。
2. 4月に編集の仕事を受け付けてから、やっと三号を発刊するはこびになった。編集経験のないものにとっては、本当にやっと三号を発行するまでにたどりついたという感じである。休暇に入るまえに所員各位のお手許に届けるよう努力をしたが、やや遅れてしまったことは残念であるが、これで夏休みも安心して迎えられることと思う。
3. これまでの経験から、月報編集は原稿を頂戴するまでが全編集過程の四分之三で、もっとも苦心のしどころであることを痛感している。これが逆に原稿が殺到して割付に苦心し、折角の原稿を何時掲載してくれるのかとお叱りを受けるようになれば、編集もスムーズになるものと思案している。休暇中の所員各位の研究の成果が、秋からの月報誌上に反映されてくることを大いに期待している。
4. 毎号の所員の研究業績の紹介には、できるだけ遺漏のないように努力しているが、なにぶんにも専門範囲が広汎でかつ分化がすすんでいる現状では、完全を期し難い。紹介リストを完全なものとし、資料的価値をもたせるためには所員の御協力を得たいと考える次第である。論文を発表され、著書を出版された場合は、是非社研事務局に御一報下さい。できれば著書、抜刷等一部を御恵与下されば、社研書庫の充実もはかれ、大変有難いことと存じます。

（事務局：宮坂・宮下記）

東京都千代田区神田神保町3の8

専修大学社会科学研究所 電話（265）6211～20〔内線53〕

（発行者） 小 林 義 雄